

継続特集 3.11 後を拓く

大災害で寺院は何ができたのか

—避難所となった寺院の行動と新たな試み—

千葉 望¹

東日本大震災のとき、140 日間にわたって避難所となった岩手県陸前高田市の正徳寺。当時の受け入れ状況から避難所解散後も続いた被災者との交流、より深い教学理解のための教室開催など新たな動きをここで紹介する。

¹ ちばのぞみ：フリーライター

私の実家は岩手県陸前高田市小友町の寺院で、東日本大震災では被災を免れたため 140 日間にわたって避難所となった。その間住職である弟は避難所の所長となり、弟嫁は実質的に避難所を切り盛りする役目を担って忙殺されることとなった。私は東京にいて支援を続けたが、弟夫婦からの情報や帰省した際の見聞は、宗教施設が被災者を受け入れることの意味を繰り返し考えるきっかけともなった。避難所となった宗教施設の実態や動向については何人もの研究者が記録されているので、ここではあくまでも「私的」ながら、内部をのぞくことのできた人間として被災直後とその後の状況について述べたいと思う。

1. 東日本大震災当日のこと

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 47 分、私の父祖の地である岩手県陸前高田市を震度 6 強の揺れが襲った。これまでも 10 年に一度程度、大きな地震に見舞われる三陸の地震多発地帯ではあったものの、このときはそれまでとは様相が異なっていた。揺れはおよそ 3 分間の長さにわたって続き、何度かのピークがあった。

陸前高田市の老人福祉課係長だった私の弟（正徳寺住職）は、激しい揺れがようやく収まるとすぐにあらかじめ決められていた担当区域へ向かった。他の職員も同じように担当区域へ向かった（平地での避難誘導を担当していた多くの職員は殉職した）。三陸に生きる者にとって、大きな揺れは即、津波を意味する。年配者は 1960 年のチリ地震津波のことをよく記憶しており、それを耳にして育った者も多い。これまでに経験のない大きさの揺れからチリ地震級の津波がくることは容易に予測できたであろう。

弟が担当しているのは、市内小友町両替の自宅の近隣にある「両替」と呼ばれる地区であった（我が家は「茗荷」）。ここは漁師が多く暮らす集落で、海に近く標高が低いので、チリ地震津波によって造られた高い防潮堤によって守られていた。だが高齢化が進む沿岸部の例に漏れず、ここも昼間は高齢者だけが暮らす家が多かった。

弟は市役所の駐車場に停めてあった車に飛び乗るとすぐに自宅を目指した。自宅は標高約 30 メートルの高台にある真宗大谷派（東本願寺系）正徳寺。弟は市の職員と住職との兼職で、市役所での仕事の間は弟嫁が寺を守っていた。弟は自宅に車をとめるとすぐに裏山に 10 メートルほど駆け上がり、次に両替集落に向かって駆け下りた。そこではすでに町会長が各家に避難を呼びかけてまわっていたが、なにぶん年寄りが多い。また、ここで大きな問題があった。

陸前高田市に限らないことだと思うが、51 年前のチリ地震津波の体験と記憶が邪魔をしたのである。チリ地震津波は陸前高田市に大きな被害をもたらし、8 名の死者が出たが、結局そのときの記憶が人々の判断基準となっていた。

「あのときは海に近い陸前高田駅までしか津波が来なかったから」

「その後、立派な防潮堤もできたから」

あれほど大きな地震がありながら、そして津波が市内に到達するまで 30 分の時間がありながら、多くの人々の初動は決して早いものではなかった。停電でテレビが見られないなか、津波でごちゃごちゃになった家の中を少しでも片付けようとか、ものを持ち出そう、もう少し情報が入るのを待とうという心のすきが邪魔をした。また、せっかくだって高台に逃げてから、大事なものを取りに行こうとした人もいる。

のちに私が町会長に聞いたところでは、その「大事なもの」は「お金、車、薬、位牌」

であったという。地方では車は必需品だし、お金や薬もなくてはならない。位牌を取りに戻るといふ行動は、先祖の祭祀を大切にする地方の人々の気持ちを知る私には納得のいくものである。だが、都市生活者には「位牌」は理解しづらいことかもしれない。仏壇のない家がもはや多数派であろうから。

幸い両替集落のほとんどの人は逃げおおせることができたが、残念ながら 2 名の方が家に戻るなどして亡くなっている。集落は海に迫っていたもののすぐ裏手が山だったことで、避難が早かった。陸前高田の高田町などの市街地は高台まで距離のある家も多く、また市内を流れる気

仙川を遡る津波と、海から直接襲いかかる津波とにやられて多数の死者が出た。

ともあれ、弟は集落に降りるとすぐに高台に人々を誘導した。たまたま近くに小さな鉄工場があり、その従業員の手を借りて、歩けない高齢者は一輪車に乗せ足弱のものにはロープを巻いて上から引き、下から押し上げて急勾配の坂を上った。そのときはもう、人々が頼みにしていた防潮堤を真っ黒な波が越えようとしていた。脇目も振らずに避難しなくてはならないはずなのに、年寄りたちは何度も振り返っては慣れ親しんだ我が家が飲み込まれるのを見た。それは現実でありながら受け止めきれない、あまりにも過酷な大災害であった。

人々は何波にもわたって襲いかかる津波から逃れて、最初は正徳寺よりもさらに高台の公民館に避難したが、そこは避難者の数に比べればあまりにも狭い空間で、文字通り立錐の余地もないほどだった。そして日没が迫る。避難者のリーダー格である町会長から、弟夫妻に、「(公民館よりもはるかに広い) お寺の庫裏に避難させてもらえまいか」という申し出があった。市職員として担当以外の地域も見回り、学校の裏山に避難していた家族の無事を確かめた弟は、今度は家を失った人々をどう保護すればよいのかという大きな問題に直面した。それは寺の「坊守」である弟嫁も同じであった。

2. 避難所としての要件を満たした寺院

思えば、正徳寺は避難所としての要件が整っていた。

真宗大谷派をはじめ、浄土真宗の各宗派では「御講」を大切にする。御講は門徒が集まって聴聞（説法を聴くこと）や勤行を共にし、また自分たちで料理を作って食事を共にする集まりである。正徳寺ではいくつかの地域に分けて門徒が月に一度集まり、御講を続けてきた。12月の「報恩講（年に一度親鸞聖人の忌日前後に行われる大きな御講）」ではそれがさらに規模の大きなものとなる。

田舎で地所が広いこともあり、正徳寺には広い本堂のほかにさらに広

い庫裏があり、何十人もが一緒に作業のできる台所も備わっている。そこにはプロパンガスの業務用ガスコンロ2台のほかにも通常の2口コンロが1台（それでも火力は強い）あり、広い流しが2つあった。台所の中央にはステンレスの大きな作業台が2台、食器や盆もたくさん備え付けられている。

玄関が2つ、勝手口が1つ、ぐるりと広い縁側に囲まれ、広間に12畳の座敷が2つ、8畳の座敷が1つ。それに簡易水洗のトイレが2箇所あり、男子用小便器が3つ、和式トイレが4つ、洋式トイレが1つついていて、屋外にも汲み取り式のトイレが建っており、そこには男子用小便器が1つ、和式トイレが2つあった。どちらも汲み取り式で、停電していても使える。震災後の停電は1カ月半に及んだが、市が優先的にバキュームカーを回してくれたため、衛生状態が保たれ、まさに避難所に適した環境だった（避難所となった寺院では水洗式トイレのところもあり、そこでは停電解消まで便の処理に大変苦労があったという）。このほかに自宅の建物もあるが、ここは避難所運営中にはほとんど使われなかった。第一家も避難所で被災者と共に生活することを選んだからである。本堂を開放する必要もなかった。避難所となった寺院には本堂を開放したところもあったが、生活施設としては設備が足りないし、葬儀など本来の寺務との両立に苦労したことだろう。

大震災当日、正徳寺で夜を過ごした人々は約150名。その中には研修生として水産加工施設へ働きに来ていた中国人もいれば、赤ちゃん連れのお母さんもいた。ペットの犬を連れている人もいた。家を流されないまでも、内部がめちゃめちゃになってしまったとか、恐怖心が強くて家にいられないなど、避難の理由はさまざまであった。とにかく来る人をすべて受け入れた。

寺には一般の家よりも多めに備蓄があった。わずかながら田んぼを持っているので精米された米、未精米のもみ、菓子や茶葉。座布団や布団も多めに備え付けられている。また、いつかこのような災害が来たときのためにと保管していた、電気を使わずに部屋を暖められる反射式の石油ストーブが6台あった。このほか山から引かれた水が庭のパイプ

から豊富に流れ出ていた。

避難者が集まると暗くなる前に炊き出しが行われた。精米済みの米を大きなガス釜で炊く。小さなおにぎりが1つずつ温かいお茶と共に配られた。何もかも不足していたが、正徳寺では被災当夜から温かい食物が食べられたことは何よりだったと思う。のちに私が被災者に聞いたところによると、内部はストーブと人いきれで寒さを感じずに済んだという。

津波にいったん飲まれて浮かび上がったが弟夫婦が戻ってくる前に正徳寺にたどり着き、寺に隣接する自宅の風呂に溜めてあった残り湯で体を洗って、あたりにあった服に着替えて休んでいた人もいたという。私は震災後初めて帰省した際に風呂場を見たが、すさまじい泥が壁まで飛んで残っている様子に衝撃を受けた（断水したため、風呂場を洗うこともできなかったのである）。津波に巻き込まれるとはこういうことなのか、よくぞ助かって寺まで逃げてきたと思ったものである。

正徳寺では広い座敷がすべて畳敷きであったことも、避難所として幸いだった。畳は温かい。体育館などに避難した人たちは敷くものもなく、どれほど寒かったことだろうか。東日本大震災ではせっかく助かったのに低体温症で命を落とした方が少なくない。近隣にある寺では、体育館に避難していた檀家から文句を言われたという。檀家であれば優先的に避難させてもらいたいという心情はわからないではない。しかし、たどり着いた順番に受け入れるのはあの状況では仕方のないことで、寺が被災者を選別することはできないだろう。

このほか、法要で使われる長くて太いろうそくと燭台があったことにも助けられた。その後電気が通じるまで1カ月以上かかったが（これでも東北電力に交渉して、早めてもらった）、発電機が届く前でもろうそくで最低限の明かりを取ることができた。

このように振り返ってみると、大災害のときに正徳寺は宗教施設としての特性を活かし、避難所としての役割を果たすことができたといえる。真宗大谷派の寺院として「御講」に対応できる建物と設備があったこと、多少の備蓄があったこと、山の水が引かれており水道が止まって

も命の水は断たれなかったこと、さらに「孤立していたこと」が功を奏した。

孤立とは、ライフラインがネットワークではなくスタンドアロンとでもいうべき状態だったことを指す。都市ガスではなくプロパンガスと反射式石油ストーブ（ストーブは調理や湯沸かしに役立つ）。簡易水洗の汲み取り式トイレ。陸前高田市はどこもプロパンガスだが、地域によっては水洗トイレになっているところも少なくない。その結果、避難所となった寺院でも排泄物の処理や衛生管理に大変苦勞したところがある。

3. チリ地震津波でも避難所だった

思えば正徳寺は1960年のチリ地震津波の際にも避難所となっている。被災した集落と近かったこと、高台で二次的被害の危険が少ないと見込まれたことが大きかったのだろうか。当時は祖父が住職を務めており、庫裏兼自宅は江戸時代に建てられた古いものだった。台所には大きな囲炉裏と2つ口の竈があり、広間にも炭を使う囲炉裏が切られてあった。当時のこととて、まだ火鉢が現役でいくつも備えられていた。トイレは汲み取り式である。多くの家がそうだったように、今以上の「スタンドアロン」であった。

以下は『チリ地震記念 三陸津波誌 1960』のあるページの記載である。当時、避難所となった寺院は2カ寺であり、神社は1社のみであった¹。

罹災者避難所

高田町……高田高校、光照寺、八坂神社

気仙町……気仙旧役場、旧支所

米崎町……米崎中学校

小友町……小友小学校、正徳寺、両替公民館

あれほど語り継がれてきたチリ地震津波であるにもかかわらず、避難所の数が少ない（今回も住民が正徳寺に避難してきた「両替」地区の両替公民館も避難所となっているのが目を引く）。それは何よりも東日本大震災との規模の違いを物語っているだろう。それでも、家を流されて避難してきた人々の記憶によれば、本堂の前に何人かの遺体が安置されていたという。寺は避難所であり、遺体の安置所でもあったのだ。祖父は以前小友村の村長を務めていたこともあったから、地域の要請には当然応じたのだと思われる。

いつかまた大きな地震や津波が来たら、また我が家が避難所になるのだ。誰に言われたこともないしきょうだいで話し合ったことはなかったが、住職である弟夫婦は覚悟していたという。また、私自身そうなることを予想していた。

寺院であれば、何か災害があればなんらかの形で協力するという意識は多少なりとも持っているものである。だが東日本大震災では寺院自体が流され、あるいは損壊してしまって、避難所になることが叶わなかったところが多い。なかには門を閉ざしていたところもあると聞くと、事情はそれぞれ異なるので単純に批判することはできない（他県の例では避難所となっていたにもかかわらず、「門を閉じていた」という誤った噂が流れた寺院があるという）。住職や家族が高齢だとか病気がちという理由で門を閉じることもありうるだろう。

さいわい正徳寺には40代半ばの住職夫妻がおり、家に年寄りや病人も抱えていなかった。また住職である弟は市の職員だったから、大津波後の見回りでたまたま顔を合わせた他の職員に、たくさんの人々が寺へ避難していることを伝えることができた。その後、すばやく指定避難所になったことで行政や自衛隊の安定的な支援を得ることもできた。個人宅に少人数で避難していた人たちのなかには、情報がなかなか行政に伝わらずに支援が遅れたところも少なくない。それほど被害は大きく、被災者が広域に散らばっていたというあかしでもある。

私が弟一家の無事を知ったのは大震災から2日後で、庫裏に100人以上が避難していることもそのときにわかった。もっとも私はたとえ弟

夫婦が死んでいたとしても、絶対に正徳寺が避難所になっていることを疑っていなかった。内陸部に住む姉も同じだったし、おそらくは亡父のきょうだいたちもそう考えていただろう。

私は庫裏の構造や設備を熟知しているご門徒が多いことから、いざというときには自主的に被災者に開放するに違いないと思っていた。それなら、住職夫婦が無事であろうとなかろうと、寺の人間として支援を急がなくてはならない。

私の姉は陸前高田市からふだんなら車で2時間の盛岡市に暮らしていたが、ガソリンが不足していて動きがとれず、正徳寺の様子を見に行っただのは1週間後である。このときはもう、驚くほどの物資が届けられていた。衣類は中古品がほとんどであるが、量だけは揃っていた(中古の衣類が溢れかえって悩みの種になるのはその後のことである)。姉が届けた新品の下着や歯ブラシは不足していて、たいそう喜ばれたという。被災後の衛生管理は大きな課題であり、防災グッズの袋に歯ブラシや歯磨き類、下着に貼るシート類は必須だと考えさせられた。

物資が豊富だったのには、避難所としてすぐに支援を受けられたということのほか、「寺」だったことが大きい。まず本山から毛布などが届けられ、その後も継続して支援を受けられた。真宗大谷派は仙台教区を中心に、手厚い支援体制を敷いていた。また他宗派の方々も「寺が避難所になっている」というその一事だけで苦境が想像できるらしく、お金や物資を届けてくださった。本来寺院とは苦しむ人々に手を差し伸べるのが役割であり、いつなんどき自分たちが同じ立場になるかわからないという気持ちもあったのだろう。ありがたいことであった。

4. 本来の寺のあり方に近づいた

正徳寺の避難所は結果的に7月末まで運営されることになった。被災者の数は徐々に減り、親族の家に引っ越したり、内陸部へ転出したり、いち早く仮設住宅を当てて移っていったりした。だがもっとも数の多かった「両替」の人たちは話し合いの末に、すぐ近くの使われていな

い畑を借りてそこに仮設住宅を建ててもらい、まとまって入居する手はずとなった。それまでは寺で共同生活を送ることとなり、弟一家も最後まで生活を共にした。その間に避難所はさまざまな支援活動の場となってたくさんの人々が集まってきた。支援者以外にマスメディアや研究者の訪問もあった。

郊外にある寺院で人数の割に境内や建物にゆとりがあったため、子供たちに遊びや勉強の場を提供できたことは恵まれていたと思う。避難所となった学校の体育館では、多くの人が板の上に段ボールやマットを敷いて過ごしていたため、そこで駆け回ることはむずかしかった。校庭は最初のうちは駐車場に、のちには仮設住宅の建設場所となったところも多い。被災者は譲り合って暮らしていたとはいえ、子どもたちの歓声などがうるさいというクレームは少なくなかった。ストレスが膨れ上がり、ちょっとした刺激で爆発しかねなかったのである。私が初めて寺に戻れたとき、目にしたのは鬼ごっこやチャンバラごっこに興じる子どもたちの群れであった。

また、広い場所があったことと弟夫婦には小学校卒業を間近に控えていた長女、小学3年生の次女、1年生の長男があったことから、学校関係者の出入りがしやすかった。まずは大震災のためにきちんとした卒業式ができずにいた小友小学校の卒業生や教師、保護者を集め、庫裏で簡単な式を行った。

避難者の方々が協力して大広間をきれいに掃除し、台所で料理を作って、その場にいた全員で共に温かい食事をとることができた。正徳寺では調理設備があったので、ふだんから温かい賄いを食べることができていたが、ずっと冷たい弁当だけで暮らしていた子どもや教職員もいたのである。残念ながら私はその場にいられなかったが、関係者全員が涙を流した心に残る式だったという。

またその後も子どもたちの勉強が遅れないように教員が寺を訪れ、簡単な体操を行い、学習指導を行う機会が持たれた。考えてみれば寺院とは古くは寺子屋であり、さまざまな行事を主体的に行う場でもあった。思いがけず、大震災をきっかけとして「本家帰り」することになったと

言えよう。こういう学校関係の行事に避難していた人々が協力してくれたことも忘れてはならないだろう。

ここで、東日本大震災ではなぜ正徳寺に限らず多くの寺院や神社がすんなりと避難所になったのか、考えておきたい。

私には東京・港区の高台に母方の菩提寺（浄土真宗本願寺派）があるが、そこの住職は、「大震災の当日、帰宅難民の方が来られるかもしれないと思って心算していましたが、きたのは親戚が一人だけでした」と言った。また下谷にある寺院（日蓮宗）の住職は私に、「大きな揺れがあった直後、避難者が来られるように門を開けて待っていましたが、一人も来ませんでした」と嘆いた。今こそ寺の役割を果たすのだと意気込んでいただけに、肩透かしだったそうである。

築地本願寺のように有名でイベントなども日常的に開かれている寺院には避難者が来たが、通勤途上にある普通の寺に避難しようとする人はほとんどいなかったと言えよう。私のように寺の出身者であれば、「お寺なら引き受けてくれる。畳の部屋もあるはずだ」というある種の勘が働くが、現代の都会人はそもそも菩提寺を持たないか、あってもほとんど行ったことがないという人も稀ではないのである。寺院の側でも避難者が来ると考えていたところばかりではないだろう。

あるいは、京都のようにお寺には馴染みがあるが僧に対する信頼感があまりない地域もある。これにはもちろん、今までの寺院側の問題が大きく関係しているであろう。京都にある本山のスキャンダルや僧たちの問題ある行状など、日常的に見聞きしてきたがゆえの軽侮の感情があると思われる。京都から足繁く被災地支援に通っていた若い僧が、「東北に来るとお坊さんだというだけで信頼して、いろいろ話してくださるのに驚きました。また、たとえ高校生であっても『うちのお寺は**寺で、お宗旨は**宗です。母方のお寺はこうです』とはっきり言えるんですよね」と私に語ったが、この驚きは大都市からやってくるマスメディアの人々にも共通していた。まして、自宅へ先祖の位牌を取りに行くと津波に流される人の心理は、理解しがたいのではないだろうか（もちろん、被災地の僧がみな品行方正というわけではない）。

都会とは違い東北には、今も日常的な信仰の厚い層が残っているのがある。地域の神社に奉納する民俗芸能の伝承も、少子化の中で盛んに行われている。福島避難指示区域から逃れてばらばらに避難している被災者が伝承のために避難先から集まる姿は、東北の被災地の人々なら共感できるだろう。

自宅が津波に飲み込まれ、一度は避難した公民館が狭いと判断したとき、このような精神の古層を持つ人々が近隣にある建物の大きな寺院に避難先を求めたのは当然のことだろう。正徳寺に避難した人々は門徒というわけではなく、数キロ離れたところにある臨済宗の寺院の信徒が多かった。だがそちらにもたくさんの避難者がいる。たとえ自宅が流されてしまっても、集落の人たちと一緒に近くにいたいという心理も働いた。

避難の第一段階が過ぎ、正徳寺での避難が長期化すると覚悟した人々は高齢者が多かった。彼らは常日頃から菩提寺との付き合いを持ち、盆や彼岸にはまめに墓参りをする習慣を持っている。葬儀や法事では「うちのお寺様」を呼ぶのが当然であり、人前式や直葬はまだ少数に過ぎない。したがって、彼らは僧との付き合い方や寺における振る舞い方の「常識」をある程度備えている人たちであった。

もちろん多少のトラブルには事欠かなかったが、菩提寺ではなく「よそのお寺に避難させてもらっている」という遠慮があった。また避難所の所長は住職であり、まとめ役としては両替集落の町会長もいた。学校や公民館などの避難所と大きく違うのはこの点である。最終的な決断を下すのは避難所長の住職であるというヒエラルキーがはっきりしていたのである。公共施設に設けられた避難所では、実際の運営は若手が担いながら誰が最終的な決断を下すのが明快でないところ、あるいは意見が噴出してまとめきれないところもあったと聞く。誰もが不安や悲しみからられ、パニック状態になる人、呆然とする人など、尋常の精神状態ではいられなかったなか、1,000人単位で人の出入りも激しかった大規模避難所の運営はさぞかし大変だったろうと思う。また、率直に言えばリーダーの資質にも大いに左右されたと思われる。

将来、都市部の宗教施設が避難所になったときに同じような遠慮や自助が働くか、私は疑問に思っている。現代の都会人は寺院に親しみがなく、ある種のサービス業と考える人たちが多く。家の墓石はともかく墓地の掃除は寺がやるもの、線香は寺が用意してくれるものと考えている人が多数派ではないだろうか。私自身、上京した最初のうちこそ驚いていたものの、母方の菩提寺でそうした心遣いを受けることが半ば当然のようになっている。

ただ、この点においては注釈が必要である。寺に対する遠慮はあったが、支援に対する甘えは早い時期から生まれていた。何もかも失ってしまった人たちに「もらえるものはもらいたい」という心理が生まれ、不要不急の物資でも希望して集める行為が見受けられた。人間は受け身になりやすいものである。手厚い支援にはそのような「麻薬」があり、現に今でも台風などで地域に避難所が開設されると手ぶらでやってくる人々がいるという。事前に来ることがわかっている台風であれば、当座の食料や水、寝具などは持参するのが当然なのだが、全国から支援が集まった東日本大震災での体験はこのような弊害ももたらしている。

5. これからも果たすべき役割がある

2011年7月末、正徳寺の避難所は解散した。最後まで避難していた50名ほどの人々は庫裏をきれいに掃除し、いたんだ障子を貼り替えてくれた。最後に別れの宴を開き、名残を惜しんだ。避難している間は避難所では禁酒禁煙（外での喫煙は許可）だったから、その盛り上がりは大変なものであった。

翌日から、歩いて5分ほどの三日市仮設住宅へと集団移転し、現在では多くの人たちがそこからまた高台に家を建てるなどして新しい生活へと移っている。遅れが言われながらも、少しずつ復興は進んでいるのである。だが、仮設住宅への引越し後に聞かれたのは、「避難所ではみんなと肩を寄せ合って暮らせたけれど、今はそれぞれの家に別れてしまって寂しい」という思いがけない声だった。大広間で雑魚寝していた

ときは誰もが家族水入らずで暮らしたいと願っていたはずなのに、待っていたのはある種の寂寥感だったのである。仮設住宅から災害公営住宅へと移転すれば、さらに鉄筋コンクリートのしっかりした建物になり、互いの息遣いがわからなくなっていく。都会のマンション暮らしでは当たり前のことだが、何かにつけて集まり、おしゃべりをすることが生きがいという暮らしを送ってきた高齢者たちは寂しさを抑えきれない。

一方で、寺には日常生活が戻ってきた。正徳寺の門徒の多くは陸前高田市の中心部から離れたところに暮らしている。比較的高台に住んでいた人も多く、中心部にあった寺院のように何百人単位で信徒が亡くなったわけではない（私のいところが住職を務めていた寺院では、信徒が300人以上亡くなっている。一家全滅というところもある）。それでも、家族や親族、友人知人を失わなかった人はいないのではないだろうか。大震災後には遺体安置所に何百という棺が並んだ。家族や友人知人を探して、人々はその遺体を見て回らなくてはならなかった。

離れて暮らしていると、その悲惨さはなかなか想像できないが、普通「遺体」という言葉から連想されるのは、死化粧を施された整った死に顔であろう。だがきれいな状態で発見される遺体ばかりではない。膨らんでいたり、損壊されていたりと、見るのも辛い状態のものが多かった。腕1本、脚1本で発見された遺体もある。それでも人々は、手ごかりを求めて安置所をめぐるバスに乗る。

遺体が見つければ今度は葬儀である。祭壇にする物資さえ事欠く中で、できる限りの葬儀をしたいと考える人々が多かった。弟は市の職員として、また避難所所長としてのさまざまな仕事のほかに、住職としてそれらの葬儀を執り行った。私は弟に頼まれて、過去帳や位牌に法名を書くための筆ペンを買集めて送った。また頼まれたわけではないが、自坊が被災しながら檀家の死者が300名にもなったいとこのところにも、筆ペンをたくさん送った。

平地にあった集落はほとんどが根こそぎ津波に持って行かれ、2014年6月30日時点の陸前高田市の死者・行方不明者は1,757人。当時の人口は24,246人であり、市民の7%強にあたる数字である。これほど

の過酷な体験をした被災者が、無常を感じても不思議ではない。今でも祥月命日はもちろん、月命日には欠かさず墓参に訪れる人がいる。

恐山では毎年ゴールデンウィークに春の例大祭が行われる。北東北沿岸部では恐山の信仰が篤い。だが恐山を管理する曹洞宗全通寺の院代である南直哉師は、私に、「さすがに大震災直後の例大祭には被災地の方は来られないと思っていました。しかし、現実にはたくさんの方が来られました。驚きましたね」と話した。被災して明日をも知れない状況ながら、どんな形でもいいから家族に会いたいと願ってわざわざ恐山にやってくる人々がそれほどいたのである。

一方でなぜこのような理不尽なことが起きるのか、本質的な疑問を抱く人がいたのは当然である。答えを見つけられずに苦しみ、眠れない日々を送る人々も少なくなかった。その姿を近くで見ていた弟は2013年、新たに親鸞思想を学ぶ「親鸞勉強会」を連続10回で開催した。これまでも報恩講などで布教師を招き、法を聞くことはたびたびあったが、さらに一歩進んだ勉強会である。少し前まで避難者が枕を並べて寝ていた広間がいっぱいになるほど人が集まってきた。これには弟も驚いたという。

各家庭の仏間に毎日お灯明をあげて「正信偈」をとなえる習慣があっても、「お講」にはまめに参加していても、親鸞の思想にまで分け入って理解しようとする人が震災以前はどれほどいたことか。参加者はとても熱心で、一所懸命に勉強したという。親鸞思想は、「善人なおもて往生を遂ぐ。いはんや悪人をや」の有名な言葉で知られる通り、決して理解がやさしいものではない。そこに食らいついて学ぼうとする人々がいたことは、記録されてよいだろう。そうしてまでも、未曾有の大災害で過酷な体験をした人々は、仏教の中に生きていく手がかりを求めていたのである。

その後、震災後の混乱が一段落してから正徳寺ではご門徒のグループによる本山（東本願寺）への参拝旅行も復活し、2016年には本山の報恩講に総勢21名で参加した。はるばる岩手県沿岸部（それも決して経済的には豊かとは言えない地域）から京都の本山へ行き、壮麗なお堂に

お参りをすることで得られる安らぎ。これも、精神の古層から生まれる信仰の有りようだと思う。

今も全国で次々に大災害が起き、新たな被災者が生まれている。そこで仏教者をはじめ、すべての宗教者に求められているのは、ただの支援活動だけではなく、本来の教えに立って被災者の苦しみをすくい取る努力だろう。

2017年3月は東日本大震災が起こってから6年目を迎える。7回忌の年である。かつて戦後50年を迎える2年前から、我が家は戦死者の「50回忌」を勤めようとする門徒でにぎわった。都会では50回忌はごく珍しい。今ではせいぜい7回忌になっているのではなからうか。だが東北沿岸部では、7回忌とはまだ喪の長い道のりの始まりである。その道なりに伴走しながら、一方では次の災害に向けて新たな備蓄や設備を整えるなど、寺院にはやるべきことが多々残されていると言えるのだ。

参考文献

『共に在りて 岩手県陸前高田・正徳寺 避難所となった我が家の140日』千葉望著（講談社）

財団法人日本仏教会 「東日本大震災支援中間報告書」 <http://www.jbf.ne.jp/pdf/tyukan.pdf>

陸前高田市 「陸前高田市東日本大震災検証報告書」 <http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/bousai-syoubou/shinsai/kshoukokusyo.pdf>

『チリ地震記念 三陸津波誌 1960』 <http://tsunami-dl.jp/document/064>

注

『チリ地震記念 三陸津波誌 1960』「第4章 救援活動 第1節 陸前高田市の救援活動 (1) 津波襲来直後の救援活動に関する調べ 1. とりあえずどのような救援活動がなされたか」